

# シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2008年2月号 第17号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email [omiya@church.jp](mailto:omiya@church.jp)

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

2月25(月)~28(木)は韓国のソウルで、第17回日、在日、韓国の女性神学フォーラムが開かれ、わたしは初めてでしたが、日本で暮らす韓国人の立場から参加しました。このフォーラムの主題は「代案的キリスト教女性文化を目指して」で、サブタイトルとして今年のテーマは『同性愛を中心に』でした。

わたしも初めてで会の雰囲気はまだ十分に掴めない中ではありましたが、発題が割り当てられました。『同性愛』をテーマにストレートに発題できることは今のわたしの実力からは難しかったため、教会の中にある性差別についてお話しいたしました。それは、性的マイノリティー(少数者)として生きる人々が抱えている課題と、女性が牧師にはなれない現実の中にある私が抱える課題との間に、どこかで共通している接点があるのではないかと思い、話し合いたいと思ったからです。

このフォーラムには約35名の参加者がいました。牧師、神学者、神学生、人権運動に携わる方々が、日本から韓国から参加しました。また、わたしは、以前から韓国の女性の牧師たちとつながりをもちたいと願っていたので、このフォーラムはとてもよい機会になりました。韓国は日本よりも保守的な国です。その分だけ教会で女性の立場から聖書の解釈をするということが、それほどやさしいことではありません。

ですから、教会の宣教は、ホームレスの方々への支援や貧困や平和のための宣教活動ということに対しては積極的でありながらも、性的マイノリティーの方々との関わりはたいへん消極的です。もちろん、このことは日本も同じ状況ですが、ですからたとえ生きる国は異なっても、同じような状況の中で、同じ課題を抱えて取り組み闘っている仲間たちがいる、このことに大きな励ましを受けて帰ってきました。

日本から行ったメンバーは日本基督教団と在日大韓基督教会、日本福音ルーテル教会、そして日本ルーテル教団から私でした。日本のメンバーたちともほとんど初めて出会う方々で、教団や生きる地域もそれぞれ違いますが、向き合っている課題は共通するものがあるということ。広い、そして力強いネットワークができた、励ましあう仲間が大勢与えられたことを、心から感謝しています。これから、共に、謙虚に、小さくされて生きることを強いられている一人と向かい合う、そのような歩みをしていきたいと願わされました。

春が私たちの家の戸のすぐ前まで来ています。寒さに体がかたく丸まっていた私たちは、猫がストーブの前で足を伸ばしているように、春の暖かさに体を伸ばされることでしょう。そして、私たちの心の戸もキリストの暖かく熱い愛によって開かれ、小さくされている一人へと向かって開かれることと信じています。その一人と私が、顔と顔を向き合い、心と心を通い合わせることのできる、そのような春になりますように。

聖書のみことば 2月10日(主日)四旬節第1主日礼拝  
マタイによる福音書 4:1~11

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、“霊”に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた。すると、誘惑する者が来て、イエスに言った。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」イエスはお答えになった。「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』と書いてある。」次に、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて、言った。「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある。」イエスは、「『あなたの神である主を試してはならない』とも書いてある」と言われた。更に、悪魔はイエスを非常に高い山に連れて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せて、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言った。すると、イエスは言われた。「退け、サタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある。」そこで、悪魔は離れ去った。すると、天使たちが来てイエスに仕えた。

## 説教

### 見つけ出す

2月6日の灰の水曜日より私たちは四旬節を迎えています。古いキリスト教の伝統の中では、四旬節の間は、深い悔い改めの期間として、断食の祈りをもって過ごしてきました。今のキリスト教会は段々とこのような習慣がなくなってきましたが、四旬節の間、悔い改めの次期として断食を行なうということは、ただ食事を抜くことで苦しみを味わい、それを通して自己鍛錬をするという意味だけではありません。この四旬節の間、自分から見失っている大切なものを見つけて出すための期間としての意味もあります。つまり、今の私たちの立場から申しますと、豊かさや忙しさのために見失っているものそれは何か。それがちゃんとした形のない、い

のちや心、そして神さまのことも、これらがないと生きることができない、だから大切であるとは思いながらも、自分の時を優先するために失ったまま過ごしている場合が多いのではないかと思います。さらに、現代は合理化が進み、どれだけ早くできるか、スピードによって物事の優劣が決まっていくようになりました。のろい動作やのろい思考はあまり喜ばれなくなったのです。

このような状況を生きる私たちに、再び四旬節は訪れましたが、合理化を以下に生きるか、デジタル化された社会を以下に生きるか、いかにスピード化される環境に慣れるか、そんな中で、いかに私たちは失われたものを自分から探し出すことができるか。けれども、

確かに四旬節は失われているものを見つけ出すための期間でありますから、このように礼拝に招かれているということに感謝し、少しの間共に自分探しをして見ましょう。

今日の福音書の日課、マタイ4章1節では、「イエスは悪魔から誘惑を受けるため、『霊』に導かれて荒れ野に行かれた。」と記します。イエスさまが荒野へ行こうとして行ったのではなく、神の『霊』がイエスさまを荒野へ導いたと言うのです。すぐ前の3章でイエスさまは洗礼を受けられたばかりでした。そこで、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という天からの声を聞き、そのすぐ直後、神の霊はイエスさまを荒野へ導くのです。つまり、神の「霊」は、悪魔から誘惑を受けさせるためにイエスを荒野へ導いているのです。

普通は逆に考えられると思います。私たちは、洗礼を受けたらもう神さまの者になったのだから、悪魔の誘惑など近づかなくなるだろうと。皆さんの中にはこのような思いの中で洗礼を受けられた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私もそうでした。きっと洗礼を受けたら少しは増しな私になるだろうと思っていました。洗礼を受けてからもそうなれると信じて頑張りました。これから洗礼を受けようとしておられる方もきっとこのような思いを抱いていらっしゃると思います。しかし、そのような私たちの思いとは裏腹に、いくら闘っても変わらない自分がいることを知らされる。まさに、今日、洗礼を受けられたイエスさまが悪魔から誘惑を受けさせるために、神の霊によって荒野へ導かれているのと同じようにです。もう洗礼を受けて、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と言われた、神さ

まの心に適った方になのに、なのに、神の霊が今度はイエスを荒野へ導いて、悪魔の誘惑に遭うようにしているということ。

イエスは荒野で40日間断食をなさいます。昼も夜も断食をしておられました。私たちは1日や2日間何も食べないだけで死にそうな状態になります。ダイエットのためなら、または健康のためなら一日一食くらいは抜くこともできます。けれど、これだという理由もなしに食を絶つということは考えられないのです。ですから、四十日間という時間の断食はなおさら考えられないことです。そう、だから、四十日間も断食されたイエスのその姿とは、もはや生きているとは思えない、瀕死状態のボロボロの姿だったに違いありません。こんなときに、闘ったって百選百敗するに違いない、そんなときに、悪魔が襲ってきました。悪魔はささやくのです。「あなたが神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。」つまりこの悪魔の言葉使い、「あなたが神の子なら…」という、これは、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と聞こえた天からの言葉に、真正面から挑戦している言葉そのものなのです。「あなたが洗礼を受けた際に、あなたは、これは私の愛する子と神さまから言われたでしょう。」「言われたとおりに、あなたが本当に神の子だったらその証拠を見せたらどうだ。」つまり、悪魔はイエスが洗礼を受けられる際に聞こえた天からの声を、その場所にいて、聞いていたということになります。

悪魔は人間より正確に神のみ心を知る者と言われます。神さまのみ旨がどこにあるのか、神がこの人をどれだけ愛しておられ、この人を通して何をなさろうとしておられる

のか、真っ先に知っているのが悪魔だそうです。

今日の第一日課の創世記3章で、二人に近づいていた蛇の姿をしている悪魔、これがまさに人間より先に神のみ旨を知っているという証拠です。知っていて、何とか神から人間を離そうと、人間から神を離そうと企てたのです。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るようになることを神はご存じなのだ。」と、それらしき言葉をもって人間に近づいて、結局神と人間との関係に大きな淵をおくような結果をもたらす働きをする。これが悪魔の働きです。

その悪魔が、今、四十日間も断食をして、瀕死状態になっている神の愛する者を訪れて誘惑の手を差し伸べているのです。つまり、何とかしてこのキリストの働きを邪魔しなければならぬ、キリストが神のみ旨のままにあの十字架の道をまっすぐに歩いてしまうことだけは辞めさせなければならぬ。このキリストが担う十字架によって自分が滅びていくことを、すでに悪魔は知っています。ですから、悪魔は、今度はイエスさまを聖なる都に連れて行って、神殿の屋根の端に立たせてそこから取り降りることを提案します。「あなたが神の子なら、飛び降りたらどうだ」と。

しかし、表面的な姿は瀕死状態で、弱り果てている惨めな人間でしたが、いいえ、瀕死状態だったからこそ、イエスの口から出る言葉はすべて神の言葉だけでした。つまり、この弱り果てたキリストには、神の霊のみが強くなっていました。ですから、悪魔、サタンの前に立たされているこの方は神そのものなのです。もはや、神は、このキリストを

決して離れない、どこまでもこのイエスと共にある方であると。これを知っているから悪魔は、第一の誘惑と第二の誘惑に使っていた言葉、「あなたが神の子なら…」という言葉、次の第三の誘惑の際には使わず、直接に、「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と誘うのです。この時点で悪魔は神という存在は切り離して挑むようになりました。一対一で話し合おうではないか、神ではなくあなたがどう思うか、あなた自信の考えていることで答えなさい。この私をひれ伏して拝むなら、これをみんな与えよう。そしてイエスを高い山につれて行き、世のすべての国々とその繁栄ぶりを見せるのでした。

ですから、イエスに挑まれたこの三つの誘惑とは、神と一つである、一体であるイエス、このイエスと神を切り離そうとする計略だったと、そう言い換えなければならぬでしょう。そのことがもっとはっきりされる箇所がマタイ 27 章に記されています。「そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって言った、『神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして、十字架から降りて来い。』同じように祭司長たちも律法学者や長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。『他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架からおりるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』と言っているのだから。』」（マタイ 27 章 39～43 節）。

これは、イエスが十字架にかけられた際に皮肉られた言葉ですが、このように、荒野での誘惑と、この最後の十字架にかけられたと

きの人たちの誘惑、この二つは、地上のイエスを最後まで襲っていた試練であったし、何よりこれはイエスの十字架を否定することなのです。つまり、そんなに苦しみながら十字架を担わなくてもいいのではないかと。そういう意味では、第三の誘惑において「世のすべての国々とその繁栄」を見せた悪魔が「もし、ひれ伏してわたしを拝むなら、これをみんな与えよう」と言ったこと、それはまさに究極的な十字架の否定です。キリストの十字架を否定する、なきものにする、無意味なものにすると言い換えてもいいことでしょう。十字架の否定とは、神とキリストを引き離すこと、それは同時に神と人間を永遠に引き離したままにしようとすることに他ならないのです。つまり、人間なしでも神は、キリストは生きられるではないか、そして、神なしでも人間は生きられるではないかという誘惑であるということ。ですから、この悪魔の働きからまっすぐに見えることは、十字架、つまりこのキリストはどこまでも人間とともに生きる、ということの確信であり、だからサタンは、悪魔は必死になっているということなのです。パウロの言葉で言えば、「高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない」(ローマ8章39節)。つまり、キリストの十字架はその決定的出来事だからです。

私たちは目に見える強さこそが本当の強さだと信じたくなります。意志が強くて、勇敢で、強い信仰をもっていること、このような人になりたいとあこがれてしまうのです。しかし、本当の意味で生きる勇氣、真の強い意志とは、この無力な、ありのままのわたしを受け入れることではないでしょうか。あれ

が出来る、これが出来る。あるいは、あんなればよかった、こうなればよかった、そう思う自分が本当の私ではないことを知ることです。たとえ、そうでなくても、いつまでも、どこまでも私と一緒に歩むために、悪魔の誘惑を引き受けながらも神のみ旨を生きられた方の愛、この主イエスの愛の中で私は、真の私となるのです。「高いものも深いものも、その他どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない」のです。この方の愛の中で私たちは自分を見出す、見つけ出すことができる、そうすることがゆるされているということ。

四旬節、私たちは、目に見える強さではない、目に見えない、本当に大切なもの、この十字架のキリストの愛を、その愛の中に自分が受け止められているということ、実は自分の中で失ってしまっているのではないだろうか。だからいつも「自分が…自分が…」と、信仰の強さを誇りたがり、みんなより上にいることが、みんなより強くいられることが、みんなより早くできることが第一となってしまふ。悪魔はこのような私たちを好んで近づいてくるでしょう。この四旬節には、自分の中で失われている形のないキリストの愛、けれどはっきりと、確かなものとして私の中に与えられているこの十字架の愛を探し出したいです。わたしが死んであなたが生きる、あなたが生きるために私はどこまでもあなたの十字架を担って死ぬと、その道を歩んでくださったこの方の愛を見つけ出す時として過ごしたいのです。

## 【2008年3月礼拝予定】

【主日礼拝】毎週日曜日 朝 10時30分～

3月2日(日) 四旬節第4主日

聖書：イザヤ42:14～21、エフェソ5:8-14、ヨハネ9:13-25

主題：見える

3月9日(水) 四旬節第5主日

聖書：エゼキエル33:10-16、ローマ5:1-5、ヨハネ11:17-53

主題：いのちの源

3月16日(日) 枝の主日・受難主日

聖書：ゼカリア9:9-10、フィリピ2:6-11、マタイ26:1-27:66

主題：ゲッセマネの祈りに包まれて

3月23日(日) 主の復活祭

聖書：使徒10:39-43、コロサイ3:1-4、マタイ28:1-10

主題：おはよう

3月30日(日) 復活後第1主日

聖書：使徒2:22-32、1ペトロ1:3-9、ヨハネ20:19-23

主題：聖霊を受けなさい

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

### 【その他の集会】

- ・ 3月21日は聖金曜日礼拝が行われます。午後7時より。
- ・ 第一・三水曜日午前11時よりヨハネによる福音書を女性の視点から学んでいます。
- ・ 第二・四水曜日午後7時より聖書を通読します。
- ・ 毎週金曜日午後3時半より女性の視点による聖書の学びを行なっています。特に英語学校生徒を中心に、英語学校授業スケジュールに合わせて行なっております。
- ・ その他、随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。(2008年は毎週月曜日と土曜日にキリスト教入門講座が開かれます。)